

# 東海聖会報

## 語り伝える責務

薦田直毅

思いがけず本年の東海聖化大会にお招きを頂きました。牧師となって30年が過ぎましたが、その半分を新潟で過ごし、3年前に浜松教会に遣わされました東海地区の「新入り」です。主にあってよろしく願いいたします。

幼い時からホーリネスのメッセージに触れている（文字通り「触れた」だけでしたが）ことは大きな特権であり、その恵みを伝える責任を大きく感じています。

さて、今年の2月に開催された遠州聖会のアンケート回答の中に「このようなお話を初めて聞きました」という感想がありました。別の聖会でも「初めて」、「久しぶり」という感想を昨今は耳にします。

インマヌエルがウェスレアン・アルミニアンの信仰的立場なのは、メソジストの教会だからという以上に、ウェスレーの信仰的な立場が一番聖書的と思われるからだ、ということを経験院や教会で繰り返し教えられました。聖書の教える救いが、回心と、やがて栄光の姿に変えられることだけでなく、今の世で聖く歩む恵みを教えているのなら、それを標榜し伝えることは私たちの使命である、と若い頃から教えられました。聖化が人の発想でなく、神様からのオファーであるなら、それを受けないことは十字架の血潮を無駄にすることなのだ、と。

ところが神様の「完全」なご計画に比べ、人間の不完全さはしばしばそのメッセージを阻んできたように思います。第1は理解の不完全さです。「聖くなければ主を見ることができない」ことはきよめ派であろうとなかろうと共通した理解です。しかし、その「時」の理解（救いの時、死の時、信仰生涯の中で）、その「転機」の理解（瞬時的、漸次的、瞬時的経験後の成長）、

また「程度」の理解（完全、根絶などの用語の誤解）の違いが存在し、それらは教理的な立場の違いを生みました。

第2の問題は、ホーリネスがタキシードを着て歩いているかのような「これぞ聖」というモデルの不在です。「きよめられました」と証しする人の生活の中に見える弱さや失敗ゆえの、いわば失望。もっとも、主ご自身以外にそのイメージを求めること自体が問題といえれば問題なのですが。

そして、第3の問題は語り手の不完全さ。これは誰より自分自身が自覚していることですが、それゆえに語ることに億劫（おっくう）になっていることはないか、と感じます。語るのに飽きたのではなくても、聞く人が「耳にタコ」にはないかという「恐れ」のゆえに、特に基本的なメッセージが滞っていることがないか、と自問しています。

オリンピックの体操競技に「G難度」などという技があります。「ウルトラC」は最早、スゴくないのです。それでも今、体操競技を始める人たちは、基本的な柔軟体操やウォーム・アップから始めます。同じように今、信仰者となる方々には、聖化のメッセージが「新しいこと」、「知るべき恵み」として語られなければならないメッセージです。

自分は不完全であり、「すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでも」ない（ピリピ3:19）と自覚しつつも、聖化の恵みが聖書のメッセージであるなら語り継がねばならないと思っています。エゼキエル書33章の「見張り人」、同34章の「牧者」の責任（特に33:6）を読む時、「知っていながら語らなかった責任」が問われる、という重い責務を思いながら、足りないながらも聖化のメッセージを語り続けたいと願っています。小さき者のためにもお祈りをいただければ幸いです。

（イムマヌエル綜合伝道団・浜松教会牧師）

## 追悼 「火物喜代枝師を偲んで」



2014年9月24日、火物喜代枝師が81歳で召天された。喜代枝師の生涯を振り返るとき、そこには「神の最善」を信じて歩んだ見事な生き様が見えてくる。1933年東京浅草生まれ。1945年東京大空襲で群馬県太田に

疎開した。戦火で家や家財がすべて灰になり、空しく過ごす中でD.A.パー宣教師に出会い、伝道集会に導かれ、疎開先の慣れない生活で苦勞する、そんな中でイエス様と出会った。集会で何度聞いてもわからなかったキリストの十字架のことを、あるとき「主よ。わからせて下さい。」と祈ったとき、これまでの自分の罪が押し寄せるように示され、「主よ。助けて下さい。」と叫んだ時に十字架が示される体験をした。救われた喜びにあふれ、家族伝道をし、なんと家族6人皆救われたという。

伝道に燃え、聖書をもっと知りたいという思いから献身。神学校卒業後に遣わされた東京中央教会で車田秋次師を師と仰ぎ、師からよく聞いた「聖霊様は御言葉と共に働いて下さる」という真理を、日々の信仰生活の中で確信させられた。1976年浜松教会に赴任。1991年に会堂建設を前にして夫（保男師）が57歳で召天した。三人の子どもたちの子育てと牧会、そして会堂建設のことで頭が真っ白になり、どうにもならない思いで、ひたすら主の前に祈ると、「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのもので満たしておられるところです。」（エペソ1:23）の御言葉を聞いた。自分で何とかしようとしていた姿を主に照らされ、ただ神様に信頼すればよいのだと教えられたという。

喜代枝師のように、主に祈り求め、信仰の高みへとさらに導いていただきたいと願っている。

高橋要介（浜松ホーリネス教会）

## 追悼 「渡邊重光先生を偲んで」



渡邊重光先生は1949年仙台にお生まれになりました。ある出来事を通して「人間とは」「人生とは」と考えるようになり、和食の職人として横浜のお店で働いていた時に、そのお店のオーナー夫人がクリスチャンであった

ことから求道を始めました。やがて救いに与り、さらに歩みを進める中で主の召命のみことばを聞きました。苦勞を重ねてようやく一人前になられ、これからという時でした。当然ご家族の理解は容易ではありませんでしたが、お母様は先生を信頼して献身を認めてくださったそうです。

重光先生に関して私が感じていることはまず「仕える人」。先生の献身してからの生涯は終生仕える人としての歩みでした。教団の中で先生はサブの立場を多く担われましたが、そこでも仕える姿勢が光りました。また信徒の方々に、錦へ行かれてからは地域の人々に仕える姿勢が鮮明でした。

次に「人間味豊かな人」。先生は霊的であるとともに人間味豊かなことからたくさんの方々との関わりが生まれ、キリストの香りが放たれました。

さらに「求め続ける人」。一緒に生活した頃、蔵書の量と幅の広さに圧倒されました。伝道者となられてからは魂を求め続けておられました。また先生はきよめを求める姿勢においても大変強いものがありました。何度も錦から泊まりがけで東海聖化大会に出席されていました。

重光先生は地上のレースを走り抜いて真の故郷である天にお帰りになりました。なお地上に残されているお互い、先生のお姿から学び、その信仰にならいたいと思います。

関 昌宏（春日井栄光キリスト教会）

## 第19回遠州聖会 「聖潔と宣教－キリストの証人として－」

日時：2015年2月15日(日)午後2:30～4:15  
講師：竿代忠一師(インマヌエル磐田教会牧師)  
主題：聖潔と宣教－キリストの証人として－  
聖書：ルカの福音書24章44～49節

澄み切った青空が広がり、そこにも主のご臨在と祝福を仰ぎ見ながら、第19回遠州聖会がインマヌエル浜松教会を会場に開催されました。主の恵みを慕って142名が出席しました。

昨年が続いて、子供たちによる特別音楽がささげられ、将来を担う器方の希望に輝いた賛美が会堂一杯に溢れました。またプログラムの中で、昨年にご召天された故火物喜代枝先生(浜松ホーリネス教会)の追憶の時が持たれ、私たちもその真実なご生涯に倣うべく、改めて献身の壇を築かせて頂きました。

続いて竿代忠一先生より「キリストの証人」として生きる事について、イエス様の三つの命令から穏やかに、かつ力強く聖言が取り次がれました。

1. 来なさい：イエス様は「来なさい」と我らを救いに招いておられる。我らはイエス様のもとに来て造り変えられたという(救いの)経験がある

だろうか。また我らが人生の荒波に翻弄されている時にも、イエス様は我らを招いておられ、立ち上がらせて下さる。この御方を仰ぎながら信仰生活を送りたい。

2. 行け：甦られたイエス様は「全世界に出て行き…」と命じなされた。ところで宣教とは地の果てまで行く事だけではなく、現在いる場所にあつて主を証詞する事でもある。普段の姿を通してイエス様の証詞を立てる者でありたい。

3. とどまれ：我らが「行く」ためには「上よりの力」が必要である。これは罪に打ち勝つ力、またキリストを証詞する力であり、神様がこの力を約束しておられる。この恵みに与かる条件は、主権を交代して神様に明け渡す事、そして全面的な(聖言に対する)信仰を持って神様の前に出る事である。そうする時、神様は必ず我らを聖め、この力を注いで下さる。

説教後の招きに応じて、それぞれがこの「上よりの力」を求めて聖前に出て、信仰の壇を築きました。そしてキリストの証人として新たな踏み出しを致しました。

(インマヌエル島田教会牧師 浜田耕三)

## まよめの仲間たち

その五

### 活けるキリスト 守山一麦教会

〒463-0013名古屋市守山区小幡中三丁目24-10 電話052-791-4712  
<http://moriyamaichibaku.web.fc2.com/> gca53608@gctv.ne.jp

守山一麦教会は1954年、信徒の家庭集会から守山伝道所として始まりました。1964年、無関正秀師が着任し守山一麦教会となりました。同年エツ師と結婚。信徒も少なく困難の中、無関師一家は一切を献げて従うように示され、主から自立の約束をいただきました。この時代に教会学校の子供たちが増え、現在の40代の教会員たちになっています。1982年に現在の土地・建物を購入しました。

2001年に無関正秀師が天に召されました。教会は名古屋一麦教会に合同という意見も出る一方、障害を持っているためここでなければ出席できない方もおられます。そんな中で山内とく子姉に献身の召命が与えられ、現在は無関エツ牧師、山内とく子伝道師の体制になっています。受洗者と献身者が起こされることを求めつつ伝道に励んでおられます。(石田)



無関エツ牧師 山内とく子師

# 『教会過疎』の課題への取り組み

毎年2月に行われる東海聖化交友会の総会では、議事後、一人の牧師が発表をします。担当になった人が取り組んでいる課題について発表し、それを皆で共有します。今年には日本ホーリネス教団名古屋城北教会の新田栄一牧師が「『教会過疎』の課題への取り組み」について、発表をしてくださいました。

「教会過疎」。こんな言葉を聞いたことはないでしょう。それもそのはず、最近私が使っている造語なのです。21世紀に入ってから、「日本のキリスト教界の閉塞感」という状況が報じられて久しいのですが、さらに昨今我が国の教会の深刻な課題を考えて、その一つの状況を表した言葉です。

## 二つの日本

私の前任地は、宮城県のK郡(今はK市)の過疎地域であり、そこで開拓伝道をしました。株分け信徒も知り合いもないという、異色の取り組みでした。その地域のある農家に、今から20年ほど前に、韓国ソウル市出身の某姉妹がお嫁にきました。嫁入り後早速、家族から言われたそうです。「朝の四時半に起きて、薪で飯を炊くように」。さすがに、「この平成の時代に電気釜を使わない家が世界中のどこにあるのでしょうか。」と訴えて、その家で初めての電気釜を買ってもらったそうです。この姉妹は長老教会信徒の両親のもとで育ったクリスチャンであり、田舎社会でのいろいろな戦いを乗り越えて日曜日に教会に行くことを確保しました。地元では教会が一つしか見つからず、その教会が(霊的な意味で、聖書信仰ではない、いわゆる)リベラルだったので、この姉妹は70km(名古屋市と豊川市の距離に相当)離れた仙台市内の韓国人系教会に新幹線か高速道路で通い続けました。そんな中、私たちの前任教会が開拓され、チラシを

きっかけに、私たちの教会に来るようになったのでした。こんな田舎にも、聖書信仰に立った、しかも牧師が専業・専任で常住している教会がある、ということで喜んでくれました。

この姉妹はこう言っ

ていました。「仙台も東京もソウルもみんな(都会だから)同じだよ、だけどK郡は違う」。

伝道の観点から、日本社会を二つの類型に大別できます。一つは都市部の新しい社会、二つは古い町です。古い町での伝道困難の主因は、人間関係の濃密さです。私の前任教会は、新築の会堂に駐車場がありました。しかし、来客は会堂の駐車場には自家用車を停めません。日が暮れてから、スーパーマーケット等に駐車して、隠れるように飛び込んで来ます。半径二五kmくらいは近所付き合いか親戚付き合いですから、会堂に停めた自家用車を周囲の誰かに見られただけで、その人が教会にかかわったことが町中に噂話として広がってしまうのです。住民の八割ほどは、明治以前から続く先祖代々の人間関係の中で生きています。スマホを使いこなしていても、頭の中はキリシタン弾圧の江戸時代と変わらないのです。



## 翻弄の歴史

こんな伝道困難な町でも、明治時代以来、それぞれの時期にいろいろな宣教師・教団などが教会開拓をしました。ただし、それは多くの場合に、長続きせずに(一代限りで)終わっており、今はそのほとんどが「痕跡」になっています。そんな歴史の断片を、地元の未信者が話してくれます。教会に限らず、行政(役所)も大手企業も医療・福祉等も、景気(調子)が良い時には田舎の古い町にも手を伸ばして進出しますが、景気が悪くなると都会の拠点は温存しながら、まずは田舎の古い町から撤退するのです。そのような成り行きをじっと見てきた地元の人、未信者のみならずクリスチャンまでもが、「よそ者は信用しない、都会から来た者は当てにならない」、という考え方に固まってしまうのです。

21世紀になってから今の時期は、日本聖化協力会にかかわる教団の多くにとって、景気が悪い時代でしょう。伝道不振、高齢化、牧師不足、教勢や会計の減衰など、頭を抱える問題が山積しています。その結果、兼牧や教会合流、教会廃止が現実によく起こり、各教団とも、まずは古い町の小さな教会に整理の手が及んでいくと聞きます。

## 教会難民に孤軍奮闘

私の親戚が、西日本の某古い町に教会を探し、年鑑に載っている「教会」に電話をしたら、こんなやり取りがありました。

(若い女性の応答)「はい、〇〇幼稚園です。」

「□□教会ですか。」

「園長先生に替わります。」

(男性の声になって)「はい園長の△△です。」

「教会を探しているのですが、礼拝は何時からですか。」

「うちの教会は幼稚園はやってますが、礼拝はやっていません。」

これが教会過疎の現実の一端です。形式的に



は「教会」の名目はあっても、実際に信徒が身を寄せる霊的な交わりが「過疎」なのです。その結果、「教会難民」が発生します。実際に、前述のとおり、私たちの前任地の開拓教会にも、いろんな背景を抱えた多くの教会難民が(感謝をもって)身を寄せてきました。ですから、古い町から撤退するという各教団の流れとは逆に、古い町での牧師や教会の存在意義・重要性はしだいに大きくなり、その現場にいる牧師に負担が集中しています。これは時々報道される「過疎地医療に孤軍奮闘する医師」の姿に重なります。医療の世界で「命の平等」という理念がありますが、霊的な「命の平等」も重要です。例えば、名古屋市(人口230万)内には、牧師がきちんと仕事をできる教会は数十個あるでしょうから、信徒は教団を選び好みしなければ、身を寄せる教会を余裕で確保されています。しかし、私たちの前任地(K市、T市、I市)の場合には、名古屋市の



8倍の面積に27万の人口がいて、伝道・牧会できる教会数は一か二(推定)です。そこにも人は住んでいるのですが、一教会あたりの人口、また特に伝道地域の面積が極端に大きいのです。

## 聖潔派の教会として

『あなたのうちのある者は、昔の廃墟を建て直し、あなたは古代の礎を築き直し、「破れを繕う者、市街を住めるように回復する者。」と呼ばれよう。』〈イザヤ58:12〉この聖句が示すように、私たちは、弱い者や苦闘する者の現実の課題に目を向けて、実際に破れを繕う者となることができるはずです。特に、「聖潔」を標榜するクリスチャンですから。

特に、聖潔派の教団の特長である監督制・任命制をこの課題に活かさないでしょうか。牧師の任地について、給料を稼ぐ手段としてではなく、救霊の使命を第一に考えること。そのためにも

牧師謝儀をプール制にする。最前線である苦闘教会に戦略的に人材を配置し、適宜交替をして、多くの牧師が田舎伝道の経験を共有できること。また、日本聖化協力会や日本福音連盟などの場で、地域の救霊拠点の維持について戦略的な協議をするなどできるでしょう。その中で大事なことは、私たちの誰一人として他人事として考えないことです。つまり、都会の大きい教会でも必要とあれば、進んで統廃合や田舎の苦闘教会のための会計負担を検討せねばならないということです。

まずはみんなが理解することから始まります。その意味で、この学びの場を与えられたことを感謝しつつ、情報や意見の分かち合いが広がることを期待しています。

日本ホーリネス教団 名古屋城北教会

牧師 新田 栄一

\*写真は新田師の前任教会とその近所の公園です。

## 本の紹介

## キミのところに語りかける 24のKey Word

### 聖書に登場する19人の女性の物語 沖崎学著



本書は金城学院高等学校宗教主事の沖崎学先生が高校生に向けて、人生の転機に臨む時に思い起こしてほしいキーワードを、聖書に登場する女性たちの物語と共に書いたもの。そのキーワードと女性は、「選び」(マリア)、「幸い」(マリア)、「諦め」(エリサベト)、「笑顔」(サラ)、「戦い」(ファラオの娘)、「勇気」(ラハブ)、「情熱」(マグダラのマリア)、「出会い」(マグダラのマリア)、「回復」(マルタ)、「愛」(マルタ)、「魅力」(ナオミ)、「希望」(ルツ)、「喜び」(ルツ)、「世界」(ルツ)、「光」(アンナ)、「奉仕」(シモンの姑)、「美しさ」(ナルドの女性)、「香り」(シェバの女王)、「使命」(エステル)、「賜物」(デリラ)、「家族」(デボラ)、「謙虚」(異邦人の女性)、「時間」(出血の止まらない女性)、「祈り」(ハンナ)となっている。

高校生という不安や悩みの多い不安定な時期の子どもたちに、聖書の物語を通して神さまに心を向けるよう促している。一つ一つのキーワードが数ページの物語によって構成され、かつイラストも豊富。活字離れの進んだ子どもでも手軽に読めるだろう。

なお、それらのイラストは卒業生であり、みどり野会(同窓会)の職員である松浦あんさん(日本イエス・名古屋教会)の手によるもので、聖書の登場人物だけでなく、クラス礼拝、卒業修養会など金城の高校生活の様子もたくさん描かれている。

いのちのことば社 ¥1296(税込)

(石田聖実・金城学院高校聖書科非常勤講師)



## 本の紹介 やさしい教理問答 「信仰のカルシウムQ&A」 葛田直毅著

この本は、イマヌエル総合伝道団出版事業部より2007年12月に出版された。著者が「はじめに」で記しているように「信仰の骨を強くする」うえで格好のテキストと思う。「もともと教会学校の子ども向けに書かれたため、中心的でぜひ覚えておかなければならない事柄をまとめた」とあるが、今日長い教会生活を送っていても、何となく信仰が感性になっていないかと危惧を持つ者として、まずこの本にある内容をしっかり言葉で受けとめられたらと願う。プロテスタントの流れにあってはルーテルの「小教理問答」「大教理問答」、長老改革派教会の「ハイデルベルク信仰問答」「ウエストミンスター信仰告白」等が有名であり、今日でも広く用いられている。教会生活における教理を強調しすぎて「死せる正統主義」に陥ってはならないが、同時に教理教育のないままで健全な教会

を形成することは不可能と考える。しかしながらこれまでウエスレアンの立場に立つ日本語の教理問答がなかなか見当たらなかったこともまた事実である。

「信仰のカルシウム」は神、人間、救い主イエス・キリスト、人間の救い、聖霊なる神、全ききよめ、聖書、教会、世界の終末の順に合計89の問いと答えで構成されている。一つの質問には1-2頁がさかかっている。たとえば祈禱会の折りに1ないし2の問答を扱うなら5~10分で十分可能。あるいは週一回半年ぐらいかけて段落ごとにまとめて学ぶ方法もあるかと思う。¥1944(税込)

(関 昌宏)



## 本の紹介 受け継がれた福音のバトン 新約聖書における「ケリュグマ」 中島真実著

基督兄弟団一宮教会の中島真実なかしま まさみ師が本書を2014年8月に世に問われた。新約聖書27巻が全体として「イエスは主」とのケリュグマを伝えてやまないことを、まさに読者に問うておられる。

本書は誰のために、何が書かれているのだろうか。あとがき(ウラで考えたこと)によると、基督兄弟団の機関誌「いのりのとも」に、新約聖書を楽しむ深く学べるようになることを願って連載されていた読み物であったという。

ある信徒は、本書を手に取り、約40ページを読み、「こりゃむずかしいわ」といって投げ出してしまったそうである。それを聞き伝えたわたしは投げ出した当の本人を訪ねて申し上げた。「40ページが過ぎたころから面白くなって、最後のページまで直行することになる。」と。

では、著者は新約聖書をどのように楽しく深く学ばせてくださるのだろうか。ほかでもなく新約各巻を執

筆順に並べ替え、受け継がれてきた福音のバトンの受け渡し具合を詳らかにしてくれる。すなわちガラテヤ→テサロニケ→コリント→ローマ→ヤコブ→ユダ→ピリピ→コロサイ→エペソ→ペテロ→ヘブル→テトス→テモテ→マルコ→マタイ→ルカ→使徒→ヨハネ→ヨハネの手紙→ヨハネ黙示録というように解説がされていく。

新約聖書がよく分からない人は明解に理解されるだろう。すでに分かっている方は、整理された形で新約聖書全体の福音のバトンの受け渡し加減を知ることになる。書き方が碎けて、うちとけているため、笑わせてもくれる。

いのちのことば社 ¥1944(税込)

(松浦 剛)



# 22th 東海聖会



講師 蔦田直毅師

今年は、遠州支部から講師をお迎えしての聖会です。

遠州支部は少数の教会ですが、2月の遠州聖会には140名余の人々が集います。蔦田直毅先生はその会場であるイマヌエル浜松キリスト教会の牧師です。巻頭のメッセージにもあるように聖化の恵みは私たちにとって基本ですが、それを新鮮な福音の言葉として語ってくださることと期待しています。

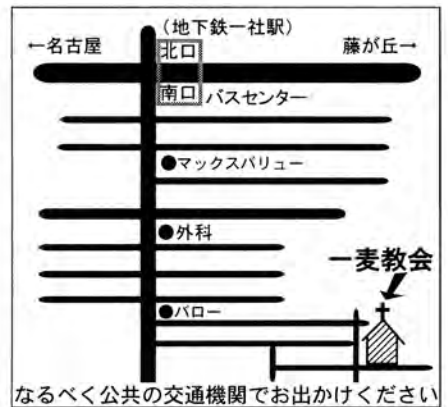
とき

6 | 27 土 2:30PM  
28 日 2:30PM

ところ

活けるキリスト  
一麦教会

名古屋市名東区亀の井2-102  
☎ 052-701-4221



東海聖化交友会

〒453-0053 名古屋市中村区中村町7-46福音センター  
問合せ(書記) / ☎ 0562-97-6468

## 10月の聖化大会にもご期待ください

10月の聖化大会は、例年1日のみで行われていましたが、今年は2日間の日程で行います。

日程 10月15日(木) 14:30、19:00

講師 ジョン・オズワルド師

10月16日(金)

14:00 講師 竿代まきば師

16:00 講師 竿代忠一師

ぜひ、お出かけください。

## 今年度の役員会構成

会長 松浦 剛師 (日本イエス・名古屋教会)

副会長 秋山直光師 (中京聖泉キリスト教会)

書記 古田大展師 (活けるキリスト 一麦教会)

会計 関 昌宏師 (春日井栄光キリスト教会)

学び 篠澤忠俊師 (ナザレン・名古屋教会)

新田栄一師(ホーリネス・名古屋城北教会)

高山清和師 (イマヌエル・豊田教会)

鈴木勝世師 (基督兄弟団・扶桑教会)

広報 石田聖実師 (日本基督教団・鈴鹿教会)